

説教

聖日礼拝 北浜チャーチ
黒田 禎一郎

2018年2月4日（日）

主 題：「天国の幸いを見る信仰」
—信仰によって—

聖 書：ヘブル人への手紙11章33－40節

はじめに

- ・前回、私たちは人間的「誇り」を「誇り」とするのではなく、人間的「弱さ」を「誇り」とする大切さを学びました。パウロは次のように語りました。
12:9 しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。 2コリント
- ・問題は「弱さ」を出せない自分、「弱さ」を認めたくない自分にあります。しかし前回学んだ「信仰によって」歩いた6人の勇士たちは、ある意味でお手本のような人たちでした。ヘブル人への手紙の著者は、「信仰によって」歩いた人たちを挙げれば、時間が足りないと言いました。
- ・しかし今日のテキストで、名前は挙げなくて、私たちが知る必要がある人々が出てきます。それは試練、迫害、患難、殉教の嵐を通った聖徒たちの歩みでした。紀元前の旧約聖書時代もそうでしたが、新約聖書時代（約2000年のキリスト教史）も、苦しみや迫害と切っても切れないものがあります。
- ・イエス・キリストは苦しみを受け迫害され、次のように言われました。
17:25 しかし、人の子はまず、多くの苦しみを受け、この時代に捨てられなければなりません。 ルカ福音書
- ・しかしイエスは迫害を受けても、結果として、死を打ち破り勝利を得られました。神を信じる聖徒たちも、苦しみがあっても先には勝利が待っています。それが聖書の教えるところです。ですから著者は、苦しみはあっても「天国の幸いを見る信仰」を説いているのです。天国の幸いを見る信仰は一時の試練よりも、はるかに尊いことです。
- ・ここで挙げられている人々は、具体的氏名は書かれていません。しかし、著者の内には疑いなく、その人たちが頭に浮かんだに違いありません。そこで私はその方がたを推測し、次の2点から学びたいと思います。

大切なポイント

1. 「信仰によって」歩んだ聖徒たち

1) 勇敢な聖徒たち

- ・11:33 彼らは、信仰によって、国々を征服し、正しいことを行ない、約束のものを得、

ししの口をふさぎ、

- 「**国々を征服し**」というのは、きっと約束の地カナンを支配していた王たちを打ち滅ぼし、そこに王国を建設したことを指しているでしょう。信仰の王たちは神に対する恐れから、正義を行うことを努めました。「**約束のものを得**」というのは、神が約束の地を与えられたという意味もありますが、まだ同時にダビデの子孫から出るという救い主の約束が与えられたという、意味もあるでしょう。
- 「**ししの口をふさぎ**」とは、ダニエルが経験したことを指しているでしょう。ダニエルは、バビロン帝国へ強制連行されたイスラエル人の中にいました。バビロン帝国がメド・ペルシャのダリヨス王によって滅ぼされた後も、ダニエルはダリヨス王にも認められました。彼は3人の大臣の一人に選ばれました。
- ダニエルには神の霊が宿っていたので、他の大臣や知事よりはるかに優れていました。しかし他の大臣や知事はそれをねたみ、何とかして彼の落ち度を見つけようとしてしました。しかし見つけることができなかつたため、計略によって彼を陥れることにしました。
- それは、王以外に頭を下げて願いごとを（礼拝行為）する者があれば、ライオンの穴に投げ込むことにするという法令を、王が出すようにというものでした。彼らはダリヨス王のところに来て、王に署名させました。彼らはダニエルが日に3度膝まずいて神に祈ることを知っていました。そこで彼らは、王の命令違反であると言って、王に訴えました。
- 王はそれを聞き心を痛め、なんとかしてダニエルを救いたいと思うのですが、それができませんでした。とうとうダニエルはライオンの穴に投げ込まざるをえなくなりました。王はダニエルのことが心配で食事ものどを通らず、一睡もしないまま夜を明かしました。王は世が明けるのを待ちかねるようにして、ライオンの穴に急行します。するとダニエルはライオンから何の危害も加えられず、元気であることが分かりました。**ダニエル書 6:21** **すると、ダニエルは王に答えた。「王さま。永遠に生きられますように。6:22 私の神は御使いを送り、獅子の口をふさいでくださったので、獅子は私に何の害も加えませんでした。それは私に罪のないことが神の前に認められたからです。王よ。私はあなたにも、何も悪いことをしていません。」**

2) 戦いの勇士となった聖徒たち

11:34 火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、

- 「**火の勢いを消し**」とは、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴが経験したことを指しているでしょう。彼らもダニエルと一緒にバビロンへ強制連行され、連れて行かれた人々の中にいました。バビロン帝国のネブカデネザル王は、金の像を造り、その像の除幕式の時にそれを拝ませました。
- その像を拝まない者はだれであっても、直ちに燃える炉の中に投げ込まれることになっていました。この3人のユダヤ人たちは、偶像礼拝をしませんでした。そこで彼らはバビロン人から訴えられ、王に結問されました。3人は生きておられる真の神への信仰を告白し、いざとなれば、神は必ず助けてくださると宣言、偶像礼拝はしないと申しました。

- ・ネブカデネザル王は、それを聞いて怒りを爆発させ、炉の温度を七倍も熱くさせ3人のユダヤ人たちを投げ込むよう、屈強な軍人たちに命じました。その屈強な軍人たちは3人を縛り、炉の中に投げ込みました。ところが炉の温度があまりに熱かったため、その軍人たちは焼け死んでしまいました。
- ・しかし、炉の中の3人のユダヤ人たちは、焼け死んだのではありません。彼らは何の害も受けず火炎の中を自由に歩いていました。さらに驚くべきことに、炉の中に投げ込んだのは3人でしたが、そこにはもう一人いて、神の子のようなお方でした。ネブカデネザル王は、彼らの信じている神こそ真の神であると認めないわけにはいきませんでした。
- ・11:34、「**剣の刃をのがれ**」とは、アハブのイゼベルがエリヤの命を狙い、彼を殺そうとしたことや、イスラエルの王ヨラムがエリシャを殺そうとした時、それから逃れることができたことを指しているでしょう。
- ・11:34 「**弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました。**」というのは、モーセや士師たち、預言者たちでしょう。モーセも最初は主の働きに尻込みしていました。また士師ギデオンや預言者エレミヤも最初は臆病でした。しかし信仰によって「**戦いの勇士となり**」ました。はじめから豪傑であった人は、ほとんどいませんでした。しかし、いざ戦いとなった時には、無敵の強さを示し軍隊を敗北させました。

3) 復活を経験した聖徒たち

- ・11:35 「**女たちは、死んだ者をよみがえらせていただきました。**」というの、ツアレファテ (Zarephath) の貧しい未亡人や、シェネムの金持ちの婦人のことを指しているでしょう。ツアレファテの貧しい未亡人の場合は、預言者エリヤの祈りによって死んだ息子は生き返りました。またツアレファテの婦人の場合は、預言者エリシャの祈りによって死んだ息子は生き返りました。
- ・11:35 **またほかの人たちは、さらにすぐれたよみがえりを得るために、釈放されることを願わないで拷問を受けました。**

このことで有名なのは、マカバイの時に殉教した律法学者エレアザル (Elazar) です。彼は神に対する忠誠を全うするために、殉教の死を遂げました。そして7人の兄弟たちと母親も、同様に殉教の死を遂げています。彼らは神の律法に背くなら釈放され、拷問や死を免れることができましたが、誰ひとりとしてそれに従う人はいませんでした。喜んで殉教の死を遂げました。それは終わりの日に復活し、すばらしい天国へ行くことができると思っていたからでした。

4) 迫害を受けた聖徒たち

- 11:36 **また、ほかの人たちは、あざけられ、むちで打たれ、さらに鎖につながれ、牢に入れられるめに会い、**
- 11:37 **また、石で打たれ、試みを受け、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏しくなり、悩まされ、苦しめられ、**
- 11:38 **——この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした。——荒野と山とほら穴と地の穴とをさまよいました。**

- ここで言われていることは、預言者エレミヤではないかと思えます。
- 11:36 「あざけられ、むちで打たれ、さらに鎖につながれ、牢に入れられるめに会い」はそうでしょう。
- 「石で打たれ」 (11:37) は祭司エホヤダ (Jehoiada) の子で祭司であり預言者ゼカリヤのことです。彼の父エホヤダが活着している間は、信仰によって生きていたヨアシユ王が、エホヤダの死後、偶像礼拝した時、ゼカリヤがヨアシユ王に厳しい神のことばを語ると、ついにそれを不快とし、ゼカリヤを石で打ち殺してしまいました。
- 「この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした。」とは、この世は彼らにとって、価値がなかったという意味です。
- 11:37 「試みを受け、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され」とは、マナセ (Manasseh) 王の時代に、木ののこぎりで真二つに切り殺されたと言われています。また「剣で切り殺された」預言者は多数いました。エリヤの時代、エレミヤの時代に多くいました。また初代教会時代は、使徒ヤコブは国主ヘロデ・アグリッパ (Herod Agrippa) 1世によって刀で殺されました (使徒12:2)。
- 11:37 「羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏しくなり、悩まされ、苦しめられ」シリヤの王エピファネス (Epiphanes) が支配していた頃、迫害が大きく、多くの敬虔な信者は自分の財産を残したまま逃げ出さなければなりません。羊や山羊の毛皮を着、無一物になり、残酷な扱いを受け、じつに住むに耐えないほど荒野や山の中、ほら穴をさ迷い続けたのでした。
- これらが旧約聖書時代の信仰者でした。著者は次のように言っています。

5) 「信仰によって」歩んだ聖徒たち

- 11:39 この人々はみな、その信仰によってあかしされましたが、約束されたものは得ませんでした。
- しかし次に、もっとも幸いなことが書かれています。
- 11:40 神は私たちのために、さらにすぐれたものをあらかじめ用意しておられたので、彼らが私たちと別に全うされるということはなかったのです。
- 著者は「さらにすぐれたもの」と言いました。それは何でしょうか？
⇒ キリスト・イエスの十字架と復活によって救われること
つまりキリスト以前の神のしもべたちも、「キリストの十字架と復活によって救われる」という意味です。著者はこの一事を伝えるために、ここまで旧約聖書の信仰の先人たちについて述べてきたのでした。

2. 天国の幸いを見る信仰

- ではここで、この11章だけで、20回も出てくる「信仰によって」とは、何を意味するか考えてみましょう。

1) 世の評価

- 先ずはじめに来る質問は、なぜ、信仰の先人たちにはこれほど苦しみがあつ

たかです。そして今の時代も、信仰を持つ時に苦しみがあります。むしろ信仰を持たない人の方が、苦しみが少ないのではないのでしょうか、と思うことがあります。

- ・信仰を持つということは、なぜこれほどに苦しみが伴うことでしょうか？苦しみがあるならば、あえて信仰を持つ必要はないではありませんか、と思う人もいます。
- ・その問に対して聖書は回答を出しています。
 - ① 苦しみには意味がある（本人しか分からない）
 - ② 苦しみを経て学ぶ糧がある（ファイナルゴールでない）
 - ③ 世の中は光と闇の闘いである
- ・神を信じる者は光の子です。光は闇に憎まれているのです。この世は悪に満ちている闇の世界です。闇の世界に生まれ、生きている私たちは、この世の支配下に置かれています。つまり、この世の価値観と評価の中に置かれています。しかし神は私たちを暗闇の子ではなく、光の子として祝福を受けることを望んでおられます。神は光であるお方です。
- ・聖書は本当に幸いなことに、闇がどれほど光を憎んでも、勝つことはできないと断言しています。 **ヨハネ福音書**
1:5 光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。
 私たちが生きるこの世は、光と闇の戦いの中にあります。

2) 神の評価

- ・皆さん！ 旧約時代の聖徒も新約時代の聖徒も、皆、天においてすばらしいものが用意されています。それは天の御国に入る特権であります。そこは、キリスト・イエスの十字架と復活によって救われた人が入る御国です。
- ・旧約聖書時代、人々は神の御前に動物をほふることによって、罪の赦しを得ました。しかし新約聖書の時代は、神の御子である聖いイエス・キリストが一度だけ捧げられました。この奥義を受け入れた人が、神の子であり、光の子となった人です。
- ・天の御国は、地上のものとは比べものにならないほどすばらしいものです。ヨハネは神から啓示を受け、天の御国の一部を次のように書き留めました。

ヨハネ黙示録

7:13 長老のひとりが私に話しかけて、「白い衣を着ているこの人たちは、いったいどれですか。どこから来たのですか。」と言った。

7:14 そこで、私は、「主よ。あなたこそ、ご存じです。」と言った。すると、彼は私にこう言った。「彼らは、大きな患難から抜け出て来た者たちで、その衣を小羊の血で洗って、白くしたのです。

7:15 だから彼らは神の御座の前において、聖所で昼も夜も、神に仕えているのです。そして、御座に着いておられる方も、彼らの上に幕屋を張られるのです。

7:16 彼らはもはや、飢えることもなく、渇くこともなく、太陽もどんな炎熱も彼らを打つことはありません。

7:17 なぜなら、御座の正面におられる小羊が、彼らの牧者となり、いのちの水の泉に導いてくださるからです。また、神は彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださるのです。」

- そうです。彼らは「さらにすばらしい世界に入るため、釈放されることを願わず、拷問の苦しみや死刑に甘んじること」、ができました。この地上で、報いらしいものは何一つ受けなくても、苦難に甘んじ、それに耐えることができたのです。それは「信仰によって」でした。
- やがて与えられる天国のすばらしさは本当であることが分かれば、それに耐えることは何でもありません。私たちも御国を見上げ、期待し、前進して行くことはありませんか。

ま と め

主 題：「天国の幸いを見る信仰」

—信仰によって—

- 今日、私たちは「天国の幸いを見る信仰」について学びました。弱い人間が自分を神に委ねる時、驚くほどの力が与えられます。罪のない人が殺され、支配者が墮落し、不義がはびこり、悪に染まった世の中で、信仰の勇士たちは自分たちも気づかなかった驚くべき力を発揮しました。
- それは、神のことばを「信仰によって」受け入れたことから始まりました。世の中のことは全て有限であり、移り変わり変化していきます。しかし、神のことばは無限であり、永遠です。その神を信じる人は、子羊イエスの血によって、神の前に聖徒とされています。そして天の都に迎え入れられる約束が与えられています。
- それでは、今の時代の生きる私たちに、何が求められているのでしょうか。
 1. 永遠の神のみことばを信頼すること
 2. 先人たちのように「信仰によって」歩むこと
- それには、私たちは心静める時 (devotion) を持つ必要があります。そして主から力と励ましを、日々いただくことが大切です。

* God bless you!